

京伝『曙草紙』のために

—その研究と展望—

山本和明

はじめに

「この『曙草紙』という作品は、いまから四十年前も前に中村幸彦氏によって、大江文坡の『勸善桜姫伝』を、その粉本の一つにしているという典拠論が発表されて以来、なぜかまだ満足な作品論のひとつも書かれていない」としたのは、高田衛氏であった（「化政期の文学的原質をもとめて」日本文学27―4）。

それから十八年、状況は一変する。京伝読本に関わる研究の中で、とりわけ文化二年刊『桜姫全伝曙草紙』の研究が進んでいるとの印象をもつのは私だけではあるまい（後掲【資料】参照）。「京伝の読本の中でもっとも人気のあるのは一八〇五年に刊行された『桜姫全伝曙草紙』だとする田中優子氏の見解（NHK『山東京伝と江戸のメディア』）は、研究者のみならず今日の読者の指向を代表するものに他ならないのである。

しかし、その研究の進展を思うにつけ、一旦ここでその成果を整理し、検証してみる必要もあるのではなからうか。その上で、何が問題となるのか、どういう「読み」の可能性があるのか、そうした話題を考える端緒としたい。「曙草紙」のために——そのための備忘録である。

「曙草紙」論のために（従来説の整理）

管見に及ぶかぎりではあるが、「曙草紙」に関して大なり小なり言及している論考は、今日三〇に及ばんとしている。こうした論考には、作品の読解の指針ともなる典拠を、あるいは参考ともなる趣向の類似作品を挙げていることが少なくない。以下、遺漏・論旨読解の誤りのあるのは覚悟した上で、「曙草紙」の章段ごとにそうした見解を列挙してみよう。煩雑になるのを防ぐため、各論考に付した符号で先学による指摘であることを明示し、考察の前提としたい。

※

※

【資料】「曙草紙」各章段典拠・参考資料一覽】

△「曙草紙」関連論文目録▽

- ア 山口剛 日本名著全集「読本集」解説（山口剛著作集）二巻中央公論社に再録）
- イ 小池藤五郎 「山東京伝の研究」（岩波書店）
- ウ 中村幸彦 「桜姫伝」と「曙草紙」（国語国文7—8 「著述集」第六巻に再録）
- エ 後藤丹治 「読本三種考証——桜姫全伝・月水奇縁・阿古義物語」（国語国文8—4）
- オ 後藤丹治 「読本考証統説」（国語国文9—5）
- カ 後藤丹治 「京伝其他の作家の読本と兩月物語」（立命館大学論叢 昭和十七年四月）
- キ 佐藤深雪 「桜姫の誕生」（俄草紙2）
- ク 高田衛 「化政期の文学的原質をめぐりて」（日本文学27—4 「江戸幻想文学誌」再録）
- ケ 諏訪春雄 「桜姫流転」（近世の文学と信仰）毎日新聞社）
- コ 清水正男 「桜姫全伝曙草紙瑣談」（文学研究五四）
- サ 柴田恵理子 「桜姫全伝曙草紙」と演劇」（国文自白21）

京伝「曙草紙」のために

京伝「曙草紙」のために

- シ 佐藤深雪「二人の桜姫——『桜姫全伝曙草紙』小論」(静岡女子大学国文研究一五)
- ス 佐藤深雪「『桜姫全伝曙草紙』論——江戸小説と子安の民俗信仰」(文学五一—8)
- セ 佐藤深雪「読本の叙述——京伝の読本を例として」(静岡女子大國文研究一八)
- ソ 佐藤深雪「読本の描写——京伝の読本を例として」(静岡女子大國文研究一九)
- タ 佐藤深雪「読本における「語り」」(日本文学三七—一)
- チ 市村亜紀子「野分豹交——『桜姫全伝曙草紙』をめぐって」(日本文学論叢一七) ※未見
- ツ 大高洋司「『優曇華物語』と『曙草紙』の間——京伝と馬琴」(読本研究2)
- テ 大高洋司「京伝と馬琴——文化三四年刊の読本における構成の差違について」(読本研究3)
- ト 大高洋司「江戸文学と悪女——『桜姫全伝曙草紙』を読む——」(オルビス甲南女子大学土曜公開講座6)
- ナ 善塔正志「『曙草紙』の主題と幻想性」(日本文芸研究四二—四)
- ニ 善塔正志「『曙草紙』の構成」(日本文芸学二八) ※未見
- ヌ 高木元「戯作者たちの「蝦蟇」江戸読本の方法」(江戸文学4 『江戸読本の研究』ペリかん社に修訂再録)
- ネ 土屋順子「読本にみる勸化本の受容——『疋萱道心行状記』と『桜姫全伝曙草紙』——」(大妻国文22)
- ノ 井上啓治「昔話稻妻表紙」「本朝醉菩提全伝」そして「桜姫全伝曙草紙」における「遊行聖」／「操淨瑠璃成立史」／「歌舞伎成立史」／「京伝のモチーフ・主題形成と読本作品」(読本研究5)
- ハ 清水正男「『桜姫全伝曙草紙』をめぐって」(『近世文学論叢』明治書院)
- ヒ 関小妹「『金雲翹伝』と『桜姫全伝曙草紙』 野分の方と玉琴の対立」(「見えない世界の文学誌——江戸文学考究——」ペリかん社)
- フ 井上啓治「『本朝醉菩提』「忠義伝」「桜姫全伝」における「地獄絵・地獄信仰」／「女人墮獄・救済」と「昔咄・説話」——京伝と馬琴の差異——」(読本研究7)
- ヘ 二川清「『桜姫全伝曙草紙』及び『勸善桜姫伝』と先行戯曲との影響関係について」(江戸文学14)

○第一 「弥陀二郎網して仏像を得る」(巻一1オ〜7オ4行・挿絵二図)

・冒頭、時代を後鳥羽院時代とするのは桜姫を「源平盛衰記」などの桜町中納言に附会するためである(ア)との見解もあったが、この点は典拠である「勸善桜姫伝」巻一の文辞を踏襲したものである。他に鷲尾の家系を説く一条も「勸善桜姫伝」(ウ)からであり、鷲尾家の説明箇所はほぼ「勸善桜姫伝」からと考えてよい。弥陀二郎(真野水二郎)に關する描写も、「弥陀次郎発心伝」に基づく(タ)との意見に対し、その拠ったところのほとんどは「山州名跡志」巻十五であった(ノ)との見解もある。京伝自身も注記的文言で「山州名跡志」の名をあげており、情報量的にもそれを越えないところから、論者は後者の指摘に従いたい。水二郎が丹後国九世戸文殊堂を訪れるという設定は唐突との印象を持つが、この点は「勸善桜姫伝」巻二で桜姫が参詣することからの関わり(ウ)であった。

○第二 「鷲尾義治玉琴を感濁す」(巻一7オ〜14オ・挿絵二図)

・冒頭の、野分の容貌性行の描写は「源平盛衰記」巻二「清盛息女の事」の条に拠る(オハ)とする。義治が野分の方に隠して玉琴を妾として設け、野分の方もそのことを下女からの讒言で知るものの、それを返ける条は、「苺萱道心行状記」の影響がみてとれ、文辞の面でも対応がある(ネ)。他にも義治が妾を隠す点は「通俗金翹伝」巻四第十三回からの趣向(ウヒ)と考えられている。後半、鷲尾太郎維綱の西海海賊征伐という背景設定は「勸善桜姫伝」(ウ)からであり、「蝦蟇丸」の登場に、文化元年南北の「天竺徳兵衛韓斬」の影響(ヌ)をみる。

○第三 「野分の方嫉妬玉琴を害す」(巻一14ウ〜27ウ・挿絵四図)

・文辞の対応から、家臣を遣わして妾を拉致する条は「苺萱道心行状記」の影響(ネ)であり、拉致された後、玉琴を野分の方がいたぶる場面は、「通俗金翹伝」巻四第十五回からの趣向(アウ)と考えられる。こうした基本的構図は近松「花山院后諍」や「弘徽殿鶺鴒羽産家」の「うはなり打ち」の図式にも採られている女の争いを描いた趣向である(ク)

と指摘できる。玉琴という名も、この章で翠翹の作る曲「妾薄命」を琴で奏することからの命名であった。妊娠している女性に琴を弾かせる類型として「壇浦兜軍記」三段目「阿古屋の琴責」がある(サ)。「蛇髪」という要素については論中に述べるとして、末尾の「妬婦」に関するコメントには「雨月物語」が係わる(ハ)とも指摘されている。

○第四 「玉琴の魂魄胎子に還著す」(巻二1オ〜4オ2行・挿絵一図)

・一部修辭に「盛衰記」巻四八から利用(オ)が指摘されるが果たしてどうであろうか。谷川に捨てられた死骸から子供が生まれ、魂は子の養育を他者に託そうとする構成は近松の「賀古教信七墓巡」に既出の趣向であった(シスブ)。この点、殺された女の胎内から赤児の生まれる小夜中山の夜啼石伝説、とりわけ馬琴「石言遺響」の七編末尾と八編からの暗示との見解(アツ)が注目される。他にも、魂魄が雲水僧の胸間に入る設定は「勸善桜姫伝」巻二からの転用(ウコ)とされ、腹から中の胎児を取り出す箇所は「奥州安達原」四段目から趣向が生まれたもの(サ)とも言われている。「優曇華物語」第十段の利用(ツ)も考慮に入れねばなるまい。

○第五 「轎裏書を遺して公連辜を償ふ」(巻二4オ〜9ウ3行・挿絵一図)

・篠村公光が出雲明神に通夜するという設定の唐突さは、「勸善桜姫伝」巻一で桜姫がこの明神の申し子として設定されていることと関わりがある(ウ)。公連の、玉琴を奪われた罪を悔いての死という内容は、「苜萱道心行状記」の影響があり、文辭の面でも対応するという(ネ)。

○第六 「野分の方季春桜姫を誕す」(巻二9ウ〜11オ・挿絵ナシ)

・桜姫の生立の描写は京伝も作中で考証しているように、「盛衰記」巻二「清盛息女の事」及び巻十九の条に拠る(オ)。

末尾の建久三年頼朝宣下以下の史的事実は「勸善桜姫伝」巻一（ウ）からの摂取である。

○第七 「清水の清玄桜姫を眷恋す」（巻二11ウ〜22オ6行・挿絵三図）

・「新薄雪物語」との関連性（サ）も言われるが、ことごとく「勸善桜姫伝」巻二からの借用（ウハ）であろう。他にも、「遇曾我中村」「宇治拾遺物語」、ならびに挿絵の類似を含め「垣根草」四「小桜奇縁」によりて貴子を生む事」をも参照したとする（ハ）。及び桜姫が信太平太夫一味に追われて山吹と逃げのび、伴宗雄に助けられる場面などは「垣根草」四「山村が子孫九世同居忍の字を守る事」の挿絵と類似している（ハ）。

○第八 「清水を退去して清玄落魄す」（巻二22オ残り4行〜25オ6行・挿絵一図）

・一部「勸善桜姫伝」巻二あたりの文章を利用（ウ）。挿絵についても寛政五年の『平将門一代記』（前太平記図会）と共通（シ）との指摘がある。本文中に記された志賀寺朝勸上人・清閑寺真燕僧都の伝承を踏まえての逆転化であろうか。

○第九 「蝦蟇を唾へて小蛇両士と会せしむ」（巻三1オ〜5ウ・挿絵一図）

・本章については研究上の指摘がないようであるが、本文中に指摘されるように「山州名跡志」巻十五「弥陀次郎像」などを一部踏まえているのだろう。

○第十 「桜姫宗雄を慕ひてひとたび病に臥す」（巻三6オ〜12オ・挿絵二図）

・隣りあいの二人が契を結ぶくだりは「通俗金翹伝」巻一上第二回と巻三第九回（アハ）にある。文をとりかわすのに
いかのほりを利用した点について、「新薄雪物語」との類似を指摘する説（サ）もあるが、李笠翁「十種曲」の一「風

「箏誤伝奇」からとされる(アハ)。宗雄が庭づたいに忍び寄るくだりは「盛衰記」「大原御幸」の影響をみる(オ)。文中の詩歌は「通俗醉菩提」五(アコハ)、反歌は「待賢門院堀川集」所載の一首を変形(コハ)している。別れの際の表現は「勸善桜姫伝」巻二(ウ)とする。

○第十一 「夜第を襲ひて勝岡義治を亡す」(巻三12ウ〜17ウ・挿絵二図)

・勘当が許される、紙薦の利用という点で「新薄雪物語」と似ている(サ)が、宗雄の急の帰国とその間に起こる一大事は「通俗金翹伝」巻一下第四回を踏まえたものである(ア)。伴善雄に関する注は「勸善桜姫伝」を踏まえた「挨拶」(ウ)とみる向きがあり、宗雄の系図は「勸善桜姫伝」巻三の善良の系図(ウ)を利用している。挿絵は寛政五年の「平将門一代記」(前太平記図会)との類似(シ)が指摘されている。蝦蟇丸が義治を刺し殺し、水門を潜って逃げ去る条は、文化元年南北「天竺徳兵衛韓嘶」の舞台を彷彿とさせる(ヌ)。

○第十二 「蝦蟇丸の伝、帯取の池の記」(巻三18オ〜21オ・挿絵一図)

・「山州名跡志」巻八「帯採池」(新修京都叢書第十五―二六二頁)から着想したものであろう(ア)が、野分の方と蝦蟇丸が出会う原型は、「垣根草」三「靱晴宗夫婦再生の縁をむすぶ事」にあるのではないか、さらには「玉造小町」の一部を利用したのではないか(ハ)といった見解がある。

○第十三 「盲女小萩雪中に曲死す」(巻四1オ〜9オ7行・挿絵一図)

・「石言遺響」からの趣向(ア)との見解があったものの、この指摘にある月小夜姫の出家と「曙草紙」との関わりについて、否定する見解が備わる(ツ)。想定としながらも、「中将姫古跡松」三段切、雪責めの段との関わりや、松虫鈴

虫の話は「さんせう大夫」系統の話が関わりとも目されている(ハ)。「曙草紙」は『優曇華物語』の趣向の展開とみられる節が多く(イサ)、ここでもその点に注意を払う必要がある。平田平四郎貞継の命名は「奥州安達原」の貞任から、ということ踏まえるならば、巻四5ウ6オの挿絵が、「奥州安達原」三段目「袖萩祭文の場」の構図(雪の中、盲女、及びその命名袖萩と小萩)に似た点が存する(サ)ことも強ち無関係ではなさそうである。

○第十四 「二人比丘尼発心の記」(巻四9才残り3行×20才1行・挿絵三図)

・うつりかわる死者の相は鈴木正三「二人比丘尼」によることは、本文中の言として明らかなどころである。構想上の問題として、『優曇華物語』第十段にある女の屍の趣向から、「二人比丘尼」への連想が、第四と本章とに二分する形で働き配置されている(ツ)。文辞の上では『優曇華物語』第十段の再現だが、趣向の上では「石言遺響」の八荒五郎発心譚V型の話を踏まえる(ツ)との説がある。一部修辞の上で『盛衰記』巻一三からの利用を述べている説もある(オ)。

○第十五 「桜姫薄命を悲みて、ふたゝび病に臥す」(巻四20才×26才・挿絵一図)

・本章はあまり研究が進んでいないようである。一部修辞に『盛衰記』巻三九から利用(オ)とか、『雨月物語』「浅茅が宿」からの移入(カ)が指摘されるばかりである。しかしなぜ山州小野の里なのか問われる章であり、本稿でもそのことにこだわってみた。

○第十六 「桜姫甦生す、清玄枉死す」(巻四26才残り4行×34才・挿絵三図)

・静玄桜姫再会の場面には、歌舞伎の影響を指摘する見解が多い。歌舞伎の「清水静玄六道巡」や「遇曾我中村」の

影響（シハ）、あるいは「花系図都鑑」の北山辻堂を踏まえているとか、近松半二「姻袖鑑」「清水清玄六道巡」「桜姫操大全」の影響も指摘されている（ヘ）。他にも、この庵室の一場の表現は「勸善桜姫伝」巻四（ウハ）によるともされる。修辭を一部「盛衰記」巻十九「文覚発心の事」（オ）からとるとも言う。

鳥部野茶毘所における蘇生は文化一三年「世事見聞録」巻六「遊里売女の事」にみるように化政期にありえる事柄（ク）であつたらしく、そうした実事件との関わりも興味深い。棺桶からの蘇生については「通俗西湖佳話」中の「断橋の情跡」にもみることができ（ヘ）。本章における弥陀二郎の役割は、「勸善桜姫伝」では、本来は公光のものであつた。

○第十七 「鷲尾の家士故君の讐を復す」（巻五1オ〜5オ・挿絵ナシ）

・本章はいわば繋ぎのような章段であつて、取り立てて典拠の類は見いだせない。

○第十八 「桜姫妖気に魔はれて三たび病に臥す」（巻五5オ残り2行〜10ウ・挿絵二図）

・本章は「一体二形」の趣向をみる場面であり、謡曲「二人静」、近松による「赤染衛門栄華物語」、常盤津「二人浅間」「葱売」が関連するのではないかとされている（アツ）。離魂病を取り上げながら、最後は離魂病ではないという設定が「芦屋道満大内鑑」と関連ありとの見解もあるが（サ）、野分の方という名を手がかりに、「勸善桜姫伝」巻三、「源平盛衰記」二十六、「隅田川統倂」の所作事「双面」から着想したとの説が興味深く思われる（ハシ）。一体二形となる部分、無数の小蛇にまつわりつかれた部分等は「賤策雑収」所収、享和元年の実事件の反映（ク）という説も、作品構想の背景を考える上で興味深いものであろう。一体二形の趣向は多くの歌舞伎作品に登場しているように「天竺徳兵衛郷鏡」四段目にみえる（ヌ）という。他にも挿絵が類似する北条団水「一夜舟」巻三の一によるとの見解がある（シ）。

○第十九 「桜姫離魂化して骸骨となる」(巻五10ウ残り2行×20ウ5行・挿絵三図)

・玉琴の霊の登場は「勸善桜姫伝」巻四では時元の霊、桜姫清玄兄妹の設定も同じく巻四にある(ウコ)。また桜姫の消失の場面と「雨月物語」「青頭巾」「吉備津の釜」の類似(エカコハ)、及び一部修辭に「白峰」との関わりを指摘されている(カ)。野分の方の雷死の場面に一致する「賤策雜収」所収享和元年の実事件(ク)との関わりは先章と同じく興味深い。野分の方の描写等は「勸善桜姫伝」巻四によるとの説もある(ハ)。本章は、演劇的モチーフでいうところの清玄の怨靈化、すなわち姫に仇をなすという観点を、実は清玄ではなく玉琴であったという具合に変更している点で、その改編が眼目の一つであったのは確かである。

○第二十 「桜塚楊貴妃桜の来由」(巻五20ウ残り5行×27ウ+追考・挿絵三図)

・源宗の命名箇所は「勸善桜姫伝」巻五の利用(ウ)が確認できるが、他に巻一での「金子の童子」が一枝の桜花を携えて来る場面も利用しているのではないか。なお、一部修辭に「盛衰記」巻一七からの利用を指摘(オ)。

※

※

かつて中村幸彦氏は、著述を誇示することの甚だしかった江戸時代の作者にとつて、著と編と補綴との懸隔はかなりなものであったとした上で、「曙草紙」本文巻頭にある「江戸山東京伝補綴」という文字に着目し、「案外気弱な京伝が、何か遠慮するところあつて用いた補綴の文字ではあるまいか」とし、そこから「勸善桜姫伝」との関わりを論証された。その後の研究成果は、前掲一覽で確認される如く、基本的骨格である「勸善桜姫伝」に、何を「補綴」したのかを明らかにし、京伝「曙草紙」の特徴を改めて際立たせてくれているように思われる。

しかしながら、考えてみたい。京伝は様々な典拠群を、なぜ「補綴」したかったのだろうか。そして「何」を構築

しようとしたのだろうか。そして何よりも、なぜ「桜姫」なのだろうか。以下の私見では、そうした問題を取り上げてみようと思う。

桜姫全伝ということ

【資料】に示した章典拠のなかで、『勸善桜姫伝』の投影が見られるのは、『曙草紙』の第一・四・六・七・八・十・十一・十六・十九・二十の諸章^①であるとされる(ツ)。そして、「野分の方を主体とする章と、ほぼきれいに二分され」ており、「 \wedge 桜姫 \vee 」の章と \wedge 野分 \vee の章は物語の因と果とを荷なつて、この作品全体の枠組のひとつを形成している^②とも言う。しかし、桜姫にかかわる章においても、全てが典拠である『勸善桜姫伝』そのままなのではない。他にも、先学の探究によつて歌舞伎作品としての清玄桜姫伝承の影響が明らかにされているところである(へ)。こうした「清玄桜姫もの」とされる一連の歌舞伎作品に共通する定型は、「清水寺での清玄の見初め、その結果としての破戒墮落、及び清玄庵室での二人の再会、清玄の邪恋、惨死、怨霊化が主要なモチーフ」とされ(へ)、それぞれ『曙草紙』の第七・八・十六にみることでできる場面である^③。

仏教勸化本『勸善桜姫伝』および演劇としての清玄桜姫物の影響を云々すること——実はそれ以外にも、一見そうみえないものの中にも、京伝は「桜姫」の影響を見ていたのである。

その一。例えば第八「清水を退去して清玄落魄す」において、清玄が秘密の法を修するに際し「志賀寺の朝勸上人は御息所の歌を以て正覚に帰し、清閑寺の真燕僧都は化人の歌によりて、愛人を転じたためしもあるものを」と述べ、桜姫への思いを断ち切ろうとする箇所がある。『俊頼口伝集』・『宝物集』巻四・『源平盛衰記』巻四八・『太平記』巻三八・『三國伝記』巻六などに記される志賀寺上人の説話は、藤原時平女、宇多天皇皇后である京極御息所が、志賀寺の辺でふとしたことから上人と目を合わせた。それから上人は御息所の美しさが忘れられず、懺悔をしても面影が

ちらつき思い憧れるが、御息所の歌によって煩惱の夢さめるといふものである。いわば第八は、この説話を踏まえた上での逆転化とでも言い得る内容を持つていたのである。西澤一鳳の『脚色余祿』（嘉永年間成立）が「洛東音羽山清水寺の僧清玄墮落せしといふ事、寺記及び実説といふ書見当らず。是は志賀寺の上人、京極の御息所に懸想せしを今様に作りもふけし物か」と指摘するように、志賀寺上人の説話が原「清玄桜姫」伝承という見解が存在する。第八で清玄にあえて語らせていることからみて、何らかの形で京伝自身も桜姫伝承と志賀寺上人説話の関わりを考えていた、とは云えないだろうか。

又、清閑寺である。この寺は「勸善桜姫伝」でも「桜姫ハ義治夫婦ニ倡引テ歌ノ中山清閑寺ニ詣シ」とある寺であった。真燕上人はともかくとして、京伝の利用がした『山州名跡志』巻之三（新修京都叢書第十五―五三頁）によれば、この寺に桜町中納言女、『曙草紙』では桜姫の母野分の方の姉にあたる小督の局の塔が存在していることも注目に値しよう。何気ない言葉の背後に「桜姫」との関わりを想定し得るのである。

その二。第十八「桜姫妖気に魘はれて三たび病に臥す」に登場する「双面」の趣向である。これは歌舞伎作品に登場する趣向であり、従来指摘されてもいるのだが、清玄桜姫物語が双面の趣向とむすびついた最初の作品は、宝暦七年正月に江戸の中村座で上演された曾我狂言の『日本堤鶏音曾我』の第二番目大詰にしくまれた常盤津浄瑠璃の所作事「妹背塚松桜」であった（ケ）。しかし、必ずしも清玄桜姫物と結びつくものではないのである。西沢一鳳が前掲書で述べるように、「総体、清玄は清水場と庵室の場より外に狂言なく、跡は執着の所作事となれば、一日の趣向にたらず。ゆへにいつも抱合せの狂言は変る」ものであったという。このように一旦演劇の桜姫物で用いられたことのある双面の趣向までが『曙草紙』では取り入れられていたのである。先学の研究成果（へ）は、他にも清玄桜姫物に登場した趣向、抱き合わされた趣向の、『曙草紙』での利用を跡付けてくれるようでもある。

その三。巻末にある「追記」の存在が、何よりも私には気に掛かる。

山州名跡志、大枝山大福寺の條下に、本尊の縁起を引いて、人王六十六代一條院の御宇、市原野に市森長者といふ人住す。其娘桜姫、難産のために落命す。其迷魂あらはれ、慧心僧都の教化を受けて、成仏したるよしを録せり。案ずるに桜姫の物語是等をも附会したるやうに思はる。何にまれ、古く云伝へたる話とおぼし。

たしかに「第十九 桜姫離魂化して骸骨となる」との関わりを指摘可能な考証ではある。しかし、一條院の時代という設定、難産のために落命するという点など、『曙草紙』本文に登場する桜姫（別の言い方をすれば『勸善桜姫伝』に登場する鷲尾家の桜姫）、演劇に登場する桜姫とはかなりの懸隔が存在するのである。

このように「追記」をしてまで書かなくてはならないのはなぜか。先掲一・二の例をふまえて仮説的に述べるならば、演劇モチーフにとどまらぬ「桜姫考証」を京伝は為しているのだ、とは云えないだろうか。史実的な意味での考証を云うのではない。志賀寺上人にせよ、市森長者の娘桜姫にせよ、点と点、断片と断片とを、小説的想像力によって『曙草紙』の枠に収斂しようとする。具体的には主たる典拠『勸善桜姫伝』の桜姫に、あらゆる「桜姫」を結びつけようとする「考証」の存在が何よりも気に掛かるのである。

京伝にとって小説内部の「考証」は術学趣味として片付けられるものではなかったことは、以前に述べたことがある（拙稿「改名」という作為参照）。ここでも「桜姫」と名のつくもの、更に、そこからの連想としての「桜尽くし」までが鏤められているのである。一例をあげる。野分の方の出生を「桜町中納言成範卿（盛衰記、平家物語）の落胤（第二）」とし、その結果、娘を「桜姫」と命名をするという根拠（第六考証）など、どこも典拠にも存在しない。姫の終焉の地を「小野の里」に定めた（第二十）のも、『山州名跡志』巻之十四で確認されるように、小野の地に「桜塚」という場所が存在するためであった（この点、後述）。

桜姫、桜中納言、桜塚……全ては何らかの形で「桜」と絡んでいる。先に、一見そうみえないものの中にも京伝は「桜姫」の影響を見ていたのではないかと述べた。実に、桜姫の登場する章段は、演劇だけにとどまらず、「桜姫」物

としか括れない趣向の集大成であり、さらに連想としての「桜」尽くしにまで繋がりを見せるのである。③「洛東音羽山清水寺の僧清玄墮落せしといふ事、寺記及び実説といふ書見当らず」という西沢一鳳の言葉を再び引用するまでもなく、当時において、その実説が不明であった。また、享和文化年間にそれほど桜姫ものは多く演じられたものでもなかった。つまり、△固定▽化した演劇作品ではなかった。ならば、「桜姫」という素材は、様々な憶測が可能であるような、そうした物語であったはずである。

その「桜姫」を「全伝」化する。これが京伝によってなされた小説という枠内での「考証」成果なのである。決して事実ではない、虚構としての「桜姫」伝を描くための、多少のアソビを含んだ「考証」。それが「曙草紙」の一面を担っていたのである。④

緋い交ぜられたもの（可能性としてのへんちき論）

「桜姫」を用いながら、京伝は新しい桜姫を創作した。演劇的手法、小説作法としては常套手段とも云える。桜姫ものの集大成になにを緋い交ぜるか。また、なぜそれを用いるのか。いくつかの要素をそこにみる事ができる。

佐藤深雪氏は「勧善桜姫伝」との比較を通じて、京伝が新しく立てた趣向を次の三つに整理している（ス）。

- (1) 弥陀二郎と松虫鈴虫姉妹の発心譚△中世的発心譚▽
- (2) 信田平太夫と蝦蟇丸によってひきおこされる鷲尾家のお家騒動△父性的世界▽
- (3) 玉琴と野分の方の対立△母性的世界▽

今回、こうした趣向を含めて、典拠との関わりから概略を整理してみたい。

まず、野分の方である。高田衛氏による「曙草紙」という作品の最大の特徴が、この野分の方の「悪」の強烈さにある」との指摘以来、その後の研究は、典拠「勧善桜姫伝」にはない、野分の方をめぐる物語に注がれつつづけてきた。

そこに「曙草紙」の独自性を見いだすことは意義深いことであつたと思う。「曙草紙」の作品世界を特色づけているのは、三組の母子によつて示される母性的世界である(ス)との見解や「野分の方、玉琴、桜姫にそれぞれ振り分けられた嫉妬、怨念、恋情といった感情は、理屈を越えた、女性一般に通有のものとして、読者を共感に導く(ツ)」といった見解が、そこから導かれるに至るのである。^⑤

野分の方に関する、従来の見解を纏めておくならば、次のようになろう。

野分の方の「悪」と玉琴の「怨念」という、解決の不能な対立の構図全体の特徴は、一種の(女文化) (ク)なのであり、わが子桜姫への愛情と、松虫鈴虫への迫害が野分の方のなかで同居しているという、その排他性によそ、母性的世界において野分の方に付与された本質的な「悪」(ス)であつた。このように、清玄桜姫説話に野分の方の話が絡む、そういう筋を描いていくのが作者の意図(ハ)であり、京伝の興味の中心は、鷲尾家の興亡そのものをめぐる叙述に、ではなく、玉琴・野分の方・桜姫の三人に具現された女性に通有の性向に向けられており、そのことに直接関係を持たないストーリーを、極力簡略化しようとしている(テ)のである、というものである。

こうした先学の指摘は十分に納得させられる見解であると思う。しかし、なぜ「野分の方」なのかも問われるところであろう。野分の方の形象に際しては、「吉備津の釜」の磯良の上に思いを寄せている(カ)とか、「石言遺響」に登場する悪女万字の前の形象に非常に多くを負っている(ツ)との指摘もある。また、野分の方と玉琴の対立の構想は、「通俗金龜伝」巻四第十五回にその原型がある(ヒ)との見解があるが、同様のプロットをもつ、天明四年「隅田川俗俤」の主人公である永楽屋の手代要助の許婚の名前が野分姫であること(ツ)に、何よりもまず注目すべきであろう。この「隅田川俗俤」が、「曙草紙」に登場する双面の趣向をもつことは夙に知られるところであるが、ここに登場する大日坊のはじめの着想が、喜劇化した「清玄」ということであつたらしく、清水清玄の名を使うことさえあつた(戸板康二氏)という。ならば、「野分の方」という命名は、その点で、婉曲的ながらも、清玄桜姫物との関わりからの登

場なのであった。一方、ストーリー上の展開に関しては、先学の指摘にあるごとく『通俗金翹伝』巻四を踏襲しており、内容的にも成功している。

では『通俗金翹伝』、即ち『曙草紙』で云う野分・玉琴の世界がなぜ利用されるにいたったのか。思うに、そこに「妬婦」がキーワードとなっていることは間違いないのではないか。文辞の点で明らかな引用関係にあるとされる『雨月物語』にしろ、『通俗金翹伝』にしろ、内容に共通するのは「妬婦」というモチーフなのである。

ところで、第三・十八にみる「蛇髪」という趣向は、文字通り女性の怨み・嫉妬を具象化して印象に残る場面となっているが、これは『通俗金翹伝』にはない要素であった。「一見仲睦まじそうに暮らす妻妾の髪が就寝中に蛇と交じて争うありさまに、女人愛執の罪業を悟って俗世を捨てるとのエピソード」が、近世文芸や民間伝承に様々な類型をもって派生したことについては、既に堤邦彦氏の論考（「蛇髪の妬婦」『江戸文学』⁴）が存在する。「苺萱桑門筑紫轆」の登場により、蛇髪譚の諸要素が苺萱道心の物語に収束し、新たな伝承の定型を確立せしめた」という堤氏の見解を踏まえるならば、その後の「蛇髪の妬婦」譚は、自ずから、苺萱物なのであり、『曙草紙』にも苺萱物である「苺萱道心行状記」の影響があることは、先学の指摘の通りである。はじめに「妬婦」ありき——野分の方・玉琴は「妬婦」として形象されたのである。即ち、『苺萱道心行状記』『通俗金翹伝』『雨月物語』は、野分・玉琴の世界で桜姫もの（『勸善桜姫伝』）にない「妬婦」という要素を加えんがために選ばとられたのだと括ることができる。

では、なぜ「妬婦」なのかが問われてしかるべきであろう。『曙草紙』に「妬婦」という要素を持ち込んだのは京伝であった。その内的動機を探る上で、一つの可能性を提示したい。馬琴の『石言遺響』と『曙草紙』の影響関係については既に山口剛氏、大高洋司氏によって指摘される処である。大高氏によって、野分の方が『石言遺響』に登場する悪女万字前の形象に非常に多くを負っている点は詳細に検証されており、改めて贅言を要する必要もない。その万字前にも「妬婦」という要素を確認しうるのである。そのことは『曙草紙』には、馬琴が『石言遺響』に描いた妬婦

像が踏まえられ、より深化発展させられている」と大高氏が纏めておられる。京伝が、なぜ桜姫物に「妬婦」という要素を導入したのかは、ここに明らかとなる。文字通り「踏まえ」るために描いたのではなかったか。馬琴との間にある趣向の共用という側面と考えてはどうであろうか。問題は共用する側面と共に、如何なる△差異▽を取り入れるか、なのだが、この点は後に触れることにしたい。

つぎに、弥陀二郎と桜姫との連想はどうであろうか。

後掲「登場人物一覧」をまつまでもなく、弥陀次郎は「曙草紙」作中、孤高の存在といつてもよい。しかも、「曙草紙」中での位置づけ、何よりも鷲尾家との関係に、ある種の△揺れ▽を見ることができ。

・せん方なく水二郎（注―弥陀二郎のこと）が家財を没収し、国のさかひを追払はれたり。（略）かくて二郎発願すらく「一つは亡君亡父追福のため、二つには諸人結縁のため、三つにはおのれ罪障消滅のため、諸国をめぐる諸人を勸化して、一座の仏堂を造営し、かの靈仏を安置し奉るべし」と頻りに思ひ立ち、一つの笈を造り、尊像をいれ奉りて、これを負ひ…

（第一）

・弥陀二郎はこのごろ当国にかへり、粟生野の光明寺に寄宿しけるが、主君義治信田平太夫に打たれ、家亡びしと聞きて大に悲み、何とぞ平太夫を打ち、家を再興すべしと思ひ、五三昧をめぐる修行者となり（第十六）

・弥陀二郎再び願ひけるは「某かねて剃髪の望ありといへども、亡君の仇を報いて後と存じ、これまでは過ぎぬ、何とぞ改めて御暇を賜はれかし」と思ひこみて願ひ、とてもとゞまるまじき体なれば、是非なく暇をとらせけり

（第十八）

典拠である「山州名跡志」巻十五「弥陀次郎像」の内容に、鷲尾家からの追放という前史が新たに加えられ、発心した存在として物語と関わっていくことが、第一で記されていたはずである。それが第十六では突如「平太夫を打ち、家を再興」しようとする存在、そのために回国修業に擬した武士という存在へと変貌する。平太夫を討ち果たした後

である第十八では、家を再興することもなく、再び剃髪の僧侶として鷲尾家と関わっていかうとする。この不自然なほどの結び付け方は、その人物規定の曖昧さゆえのものであり、いつでも自由に、フレキシブルに物語に登場しうることにもなる。

主たる典拠である『勸善桉姫伝』に登場する法然に相当する役割を担わせること——これが何よりもまず弥陀二郎および常照に必要な役割であったと思われる。『勸善桉姫伝』巻四に登場する法然は、その登場があまりに突然であった。それを如何に物語世界に必然性をもって登場しうる存在に変換するか、この点に京伝は腐心したのではなかったか。そのために早々と第一で登場させてもいるのである。「弥陀二郎」と「桉姫」を結ぶもの、それは『山州名跡志』という書の存在に他ならない。先章で述べた「桉姫」考証の過程で『山州名跡志』を参照し、そこに掲載される弥陀二郎及び常照の伝承を用いた。これも京伝の考証性を物語るものであった。

三つめに蝦蟇丸の登場である。物語において蝦蟇丸が果たした役割は何か。実のところ、お家騒動において義治を殺したにすぎず、他には何もしていないのである(少々語弊はあるが)。しかも、全く関わりようのない信田平太夫となぜか結びついているの犯行であり(「義治を討たんとつけ狙ふよしを聞き、密かに召寄せて計を与へ」、その描写もごく短いものとなっている)。

さて蝦蟇丸はしのびの達人たるにより、一夜鷲尾の館にしのび入り、義治が寝所の床の下にかくれて熟睡の時を窺ひ、床の下より刺殺して首をとり、焼草に火薬をつゝみて床の下に投入しける時、侍宿の武士等出会ひければ、急にのぞみて池の中に飛入り、水門をくゞりて逃去りけり

(第十一)

その表現の簡略さを補うに十分な役割を果たしたのが、水門より義治の首級をくわえてる蝦蟇丸の姿を描いた挿絵であった。このように、読後に受ける印象に比して文面からの情報量ではかなり低い存在といえるのだが、何よりも、それは蝦蟇丸が他者に使われる存在となっているからに他ならない。第十三・十四の子虐めにしろ、野分の方の「悪」

が際立つばかりである。蝦蟇丸の登場が常に野分の方との関連においてであることが、結局野分の方の引き立て役に終始してしまつた観がある。鷲尾義治を殺した存在として、御家騒動物的展開の中では仇役を担うべき存在であつたはずが、「曙草紙」は結局のところ、玉琴の復讐譚として括られることになる。第十九での玉琴霊の発言の中にも関係していいことは、結局物語の主たる「悪」を担つていないことを意味しよう——例えば、玉琴霊によつて操られる存在、という方向付けもあり得たはずである（このことは逆に、玉琴の怨念が鷲尾家への恨みでもなく、単に野分の方への個人的な恨みにすぎぬことを意味する）。

一体、蝦蟇丸はなぜ登場したのでらうか。「蛇髪の妬婦」という趣向を用いたことからの飛躍として、蛇—蝦蟇という連想が働いたとも考えられるし、或いは、歳時記的発想のもと、春に関わりのある桜、冬眠から醒める蛇、蝦蟇という連関も考えられる。もしくは外的要因ながら、当時の流行作品の摂取とも考えられる。高木元氏によれば、蝦蟇丸が鷲尾義治の首を口にくわえて水門から逃走する場面（挿絵）などは、文化元年に上演された鶴屋南北「天竺徳兵衛韓話」「吉岡宗観邸裏手水門の場」を彷彿とさせるものがあるという。^⑥ 戯作者として、当時流行の場面を摂取し、如何にそれとの△差異▽を見せるかも必要な要素であつたろう。

最後に松虫鈴虫だが、確認したように、先の三人は何らかの形で鷲尾家に関わりをもつ存在であつた。一つは「妬婦」という要素の踏襲、一つは『山州名跡志』踏査の副産物、一つは当代の流行の摂取として登場したのであつた。だがこの松虫鈴虫は、鷲尾家と関わりある設定とはなっていない。また中世的色彩の濃い話でもある。ならば、なぜ松虫鈴虫の話が導かれたか。この問題を考えるためには、一旦立ち戻つて、「桜姫」の背後にあるものを考えなければならぬと考える。

京伝の「桜姫」には、典拠にある桜姫に無いものをもっているようである。

例えば、第十一「桜姫宗雄を慕ひてひとたび病に臥す」において、宗雄と桜姫とが再会を果たすのであるが、その時

なぜか桜姫は「君は風雅詩詠をよくし、手跡も古人にはぢ給はず。妾も亦愚ながら、歌よみ、絵かくことを好みぬ。このごろ都よりもとめたる物語絵、見せまゐらせん」と、宗雄に「小野小町が一期盛衰の事を図したる絵」を見せる。この場面はとつてつけたような印象を受けるものであり、なぜ「小野小町」かが問われるところであろう。

明らかに京伝は、桜姫に小野小町の面影を重ね見ていた。

例えば、第十五において桜姫と山吹は篠村公光と出会い、公光の住む「小野の里」に身を寄せ、そこで一旦、命を落とすことになる。第二十末尾においてこの出来事は次のように関係づけられる。

姫の終焉の地小野の里に埋めて一塊の塚となし、印の石を建て、跡ねんごろに弔ひけり。桜塚、一名文塚といふは乃ちこれなりとぞ
(第二十)

この「桜塚、一名文塚」は実在していた。「山州名跡志」巻十四(新修京都叢書第十六—四六頁)を確認すれば、そこには「○桜塚 一名文塚 在右路巷南 伝云小野小町艶色アルヲ以テ四方ヨリ送艶書如雨。仍為懺悔所収」と記されている。すなわち、桜塚とは小野小町に関わりのある場所なのであった。しかも「山州名跡志」の説明をみるかぎりにおいて「文塚」命名の理由づけがなされているにすぎないのである。なぜ「桜塚」なのか——京伝はそのことに拘ることによって、桜姫と小野小町を結びつけている。「曙草紙」の側での描写が、「文塚」ではなく、むしろ「桜塚」と呼ばれる理由を説明している点に注目するならば、物語において、「山州名跡志」に記されざる、「桜塚」と称される理由を桜姫との関わりに中で説明したかったのではなかったか。

桜姫と松虫鈴虫の説話を仲立つものとして「小野小町」を介するとき、自ずから開けてくる視界がある。小野小町といえど「卒塔婆小町」をはじめ伝説の世界で生きる存在である。とりわけ「雨乞小町」を除き、そのほとんどが壮衰に関わる伝承であることに注目してよい。第十で宗雄に示した「小野小町が一期盛衰の事を図したる絵」、そこから、第十四にあるような松虫鈴虫の母親の死骸に関わる話、典拠というならば『二人比丘尼』の話が導かれていくの

である。松虫鈴虫という二人を「二人比丘尼」に擬するには、「二人」という共通項の他に、松虫鈴虫が「勸善桜姫伝」に登場する法然上人と関わりもつた存在（広島県三原市大善寺に伝わっている）であったことが連想の契機となっているのかもしれない。

「へんちき論」ながらも、桜姫を彩る諸要素を、以上のように括ることも可能であろうか。

「曙草紙」のために

それにしてもなぜ「桜姫」なのだろうか。

京伝読本と考証随筆に関してすでに拙稿で述べたことがある。その同時進行ぶりを思うとき、その執筆動機的一端に、このことから顕著となっていく考証随筆執筆への傾倒と、その考証成果を小説内で「考証」として用いようとする可能性があることも想像に難くない。京伝に演劇関連の考証随筆の構想が存在したことは夙に有名である。時期としては後年になるが、文化一〇年「双蝶記」巻末広告に、『雑劇考古録・一名一目千古集』と題し、永寿堂から近刻される予定であった。

山東京伝著／永寿堂近刻／雑劇考古録・一名一目千古集／前編大本五冊近刻／「女かぶき若衆かぶきたえて今の狂言尽し野郎かぶきになりたる寛永正保の比の古画元禄以前のふるき役者の伝江戸中橋の芝居古雅古風なる事の考へねぎ町に芝居ありし時の考へ入かはりやくしやつつけ紋ばんづけひやうばん記絵かんばん等の始りを考へふるきを其儘にうつし入其外三ヶ津芝居にかゝはりたる古画古図を集め証を引てこと／＼考をしるし昔の芝居のかはりたるさまを其世に生れあひて目前に見るがことき随筆なり」

無論、「桜姫」が「雑劇考古録」の対象でありえたかは、今となっては知る由もないのだけれども。

あるいは、「桜姫」への興味を引き起こす引き水的役割を当時の実事件に求めることができるのかもしれない。

享和二年七月二十九日、江戸谷中の法華宗延命院住職日道が淫乱女犯で死罪となつた事件がある。『きゝのまにまに』をはじめとして、諸書（一話一言、巷街贅説、続徳川夷紀等）に見えるこの事件は、評判に立つたものらしく、三年後の文化二年四月二日、内藤山城守家来井上権兵衛が貸本向きに仕立て押込処分を受けるほどであつた。

一 文化二乙丑四月二日

内藤山城守家来

押込

井上権兵衛

右は谷中延命院住持日当、女犯の一件を著述して、貸本屋へ遣し、貸本に致候段、露頭に及び、御咎被仰付候也（後略）

無論、この事件の影響を云々することも又、憶説に過ぎぬ。ただ京伝という人情報にさとい存在を考へるときに何かあるのでは、という予見のみ心のどこかに残る。

※

※

『曙草紙』の内容に対し、強いて批評的に述べるならば、京伝はあまりに典拠である『勸善桜姫伝』に牽かれすぎてしまつたように思われる。そのために桜姫の顔がみえてこないのである。

端的に云うならば、桜姫は地の文に登場する存在であつて、その声を、肉声を聞くことはごく稀な存在といつて良い。明らかな会話箇所としては、第十で小町の物語絵を前にして宗雄に語っている場面（この場面の重要性については後に触れる）と、他には第十五、十六に一部と第十九での二人桜姫の場面であるが、これは玉琴霊が語っているので除くことができ、『曙草紙』中、頗る少ないのである。

清玄も同様に云える。本作の特徴を、京伝による創作部分にあたる野分の方側にあつたとする先学の指摘は、その意味で首肯できるものであつた。鷲尾家における自分の位置、娘である桜姫を第一に考へる点で、松虫鈴虫を虐待することは何ら矛盾することではなく、野分の方の行動は一貫したものと云えよう。しかしそれでもストーリーに重き

京伝『曙草紙』のために

をおいていたのではなかった。

実は野分の方が天罰をこうむることは、前以て読者には認知されたできごとであった。

・彼(注一野分)婦人に似ず、巧に密謀をほどこし、人はこれを知らずといへども、湛々たる青天、欺くべからず、末にいたりてつひに天罰をかうぶり、身体微塵にくだけて、死しをはんぬ。誠に是、婦人たるもの、慎むべきは、嫉妬の心なり。豈おそれざらんや、慎まざらんや

(第三末尾)

ストーリーを読むことからみれば、これはあまりに問題が多いように思われる。第十九で野分の方は雷に打たれて死ぬことになる、その先取りと言つてもよい内容を発端に近い第三で既に語ってしまうこと。物語はそれに到る(過程)としての場面、その場面ごとの趣向に興味を見いださざるを得ないのである。

ストーリーの軽視は、時として矛盾めいた場面を創ることになる。

例えば、第四の文中で「彼屍は乃ち是、玉琴がなきがらなり」とあることから、読者はすでに玉琴の死を知っていた。しかし、作中人物、とりわけ野分の方を除く鷲尾家の人々は知らないはずであった。そのため、玉琴を賊に奪われた責任から自害して果てた父篠村公連の罪を償う意味からも、公光は玉琴搜索という役割を担っていた(第五)のである。それが、第十五にて、信田平太夫のために御家滅亡となった桜姫を山吹ともども助けた公光であったが、「十七年以前、殿の御勘気をかうぶり、浪々の身となりたる(中略)小子御館にいたり、これまで苦辛仕りし仔細をきこえあげて、御勘気の御赦免をねがはんと存じ立出たる」と桜姫に語るとき、玉琴搜索というモチーフは、いつのまにか自然消滅してしまっている。「勸善桜姫伝」では大活躍をする公光も、その役割を弥陀二郎と二分し、話を変換したために、目立たぬ存在として矛盾を露呈するに到ったのである。^⑦

また、全体を覆うべき玉琴の恨みも、第十九で登場する人々の前に明らかとなるものの、その解決方法の弱さが滲みでている。なぜ自分の子である清玄までが、死ななくてはならないのか。定業によって死んだ桜姫を「甦生させ今

まで一命を保たしめたるも、妾がなせし業にて実の甦生にあらざ」(第十九)と玉琴霊は語る。玉琴によって甦った桜姫に、玉琴に「胸間井につけ入」られた清玄が、凡情を起こし、殺されてしまうという。物語の設定そのものが当初から先行作に従い、清玄の死を前提としていた。にもかかわらず、怨みを持って死んでいった玉琴の子に清玄を配する時、破綻が生じることになったのである。

京伝説本での独特の「弊」とされる筋の軽視という側面が、この作品あたりから所々に顔を出しはじめている。これは、繰り返しになるが、恐らく京伝の、考証への興味と連動した変化ではなかったか。

・「曙草紙」以降では、物語的本文のあとに、考証・注釈・教訓・勸懲などの注記が付されることが多くなり、おびただしい注記が、物語的本文を囲い込むという本文のスタイルが観察されるのである。「曙草紙」以降の作品に現われる引用書目一覧や、巻頭・巻末に掲げられる資料や考証も、基本的にはこの注記と同じく、物語的本文を注釈的に「読む」ためのものである

(夕)

京伝にとって考証が己れの資質に合う存在であることは、以前述べたことがある。このような筋の軽視は、あるいは京伝の本意ではなかったのかもしれない。冒頭に記された「補綴」という言葉に、作品の質に対して敏感な、作者の認識が見てとれるのである。

しかし、それ以上に、興味ある考証をいかに作品内部に「考証」として結実していくか——我々も、これを「弊」とするのではなく、考証をいかに作品として生成していくかの過程をみるべきかもしれない。

「曙草紙」は何を描きだしたのか。

「誠に是、婦人たるもの、慎むべきは、嫉妬の心なり。豈おそれざらんや、慎まざらんや」——第三末尾の言葉を再び引用した。野分の方・玉琴の世界が京伝によって新たに加えられ、そこに描かれた女性の嫉妬に本稿では注目をした。しかし、「嫉妬」は何を結末として生み出したか。勸善懲惡・因果応報という理念にのれば、それは常套的な、

順当な解決（結論）へと導かれるのだろう。しかし、「通俗金瓶伝」などの比較においても、何よりも気にかかるのが「曙草紙」に登場する主たる女性達の、誰一人として物語の最後にまで残っていない点——このことは注目できる結末ではなかったろうか。

本作に窺えるのは△死▽の影であり、そうした物語から窺える京伝の女性への認識、物語に潜む基本的モチーフに、私は興味が牽かれる。

・宗雄これを見るに、小野小町が一期盛衰の事を図したる絵にて、神彩飛動、誠に絶筆なり。絵詞をよみていひけるは「小町、家は巨万の富をなし、容は三千の美にまさるといへども、若うして双親兄弟を失ひ、老いて子孫親戚なし。紅顔を垢面と変じ、玉体も瘦身とかはり、つひに丐媪となりて路頭に臥す。おもふに古より世にすぐれたる佳人、よく終身の榮華を保つ者まれなり。昭君色三千を奪へども、塞外の塵を免るることあたはず。楊貴妃一國に隆けれども、馬鬼の死を逃れがたし。造物の盈つるを忌む、都て皆かくのごとし。彩雲は散じやすく、美器は碎けやすき理、いかんともすべからず」と云ひて歎息しければ、桜姫これを聞き「宣ふごとく、人の盛衰はいつ誰が身にかゝらんも知るべからず。妾がごときも翌のことははかられ申さず、思へばあぢきな世の中なり」とて涙さしぐみけり

（第十）

・思ひに九相の詩に「男女の淫業は互に臭骸を抱く」といひしも宜なり。人は皮をのみ愛して、唯いつはりの姿なる事をしらず、いづれの人かこれにあらざらん

（第十六）

・桜姫絶世の美人なりといへども、骨に化しては常の人にかはらず。思ふに醜美は只臭皮一重にあるのみ、好色の輩、こゝに於て悟すべし

（第十九）

他にも、第十四の二人比丘尼の項全般が関わるが省略に付す。

「思ふに醜美は只臭皮一重にあるのみ」という。「人は皮をのみ愛して、唯いつはりの姿なる事をしらず」という。

野分の方は「いつはりの姿」を見せ続けたひとであった。繰り返し語られる臭皮論は、ただ容貌の美醜のみに当てはまるものではあるまい。先に述べたように、仮に「妬婦」が馬琴との間にある共有意識の中で派生した趣向ならば、この臭皮論は、馬琴との（差異）を示す京伝の「返答」であり、「妬婦」に對しどう読み解くかという解説コードに他ならない。本稿では、登場の少ない桜姫に小野小町の面影をみたが、なぜ小野小町かということ、この「臭皮論」とは強ち関係のないことではなかったのである。

おわりに

馬琴は『曙草紙』を評して、言う。

京伝密にこれを悔ひて又桜姫全伝五巻を綴るに及びて出像を歌川豊国に画かしむこの書大く時好に称ひて雅俗俱に佳妙とせりその明年又うとふ安方忠義伝：京伝か作のよみ本多かる中にこの二種尤さかん也とす

〔近世物之本江戸作者部類〕 八木書店 一四七〜一四八頁

馬琴という作者は、作品の構成、整合性にこだわっていたはずである。その立場からみれば、『曙草紙』はあまりに構成に粗雑であると言わざるを得ないように思う。にもかかわらず「雅俗俱に佳妙とせり」と一定の評価を下しているのである。馬琴だけではない。春水、種彦といった戯作者たちが、ともに『曙草紙』を評価をしている。

・さくら姫 全五冊 山東京伝作 これは婦女子の耳になれたる清玄の奇談にて一部の趣向古今ならぶものなき
妙作世に絵入よみ本流行そめしも此物語を第一とはかぞへしなり 〔増補外題鑑〕和泉書院 四六頁

・よみ本は京伝の桜姫がかきふりよきやうにおほえ申候。同人の作にても稲妻表紙はおとり候やうに見え申候。しかし今は曲亭のかきふりをまなひ候かたか徳なるへし。小子か今かき候へは桜姫のおもむきへ今すこし漢学者文章をくはへ申候。 〔柳亭種彦、笠亭仙果二與フル書翰のぬきがき〕『代睡漫抄』所載

しかし、実際のところ、その作品としての完成度となるとどうであろうか。史的事実として、『曙草紙』が評判になったことは確かである。これまでの京伝読本に比して多くの挿絵があること(全三六回)もその要因であったろう。当時においても筋を読むことだけが作品の評価につながらなかったことを考えるならば、改めて京伝作品の評価を考える必要があるのかもしれない。当時売れたという史的事実と、京伝自身が傑作と認識していたかという問題は、一概に一致するとはかぎらない。しかし、『曙草紙』の好評ぶりは様々な影響を与えたものと思われる。作品としての完成度とは別に、「売れた」という要素からであろうか、例えばこの好評が、『双蝶記』へと繋がるストーリーの反線条的性格へ、或いはより「考証」的性格を小説内部に描くことに拍車をかけたのではないだろうか。

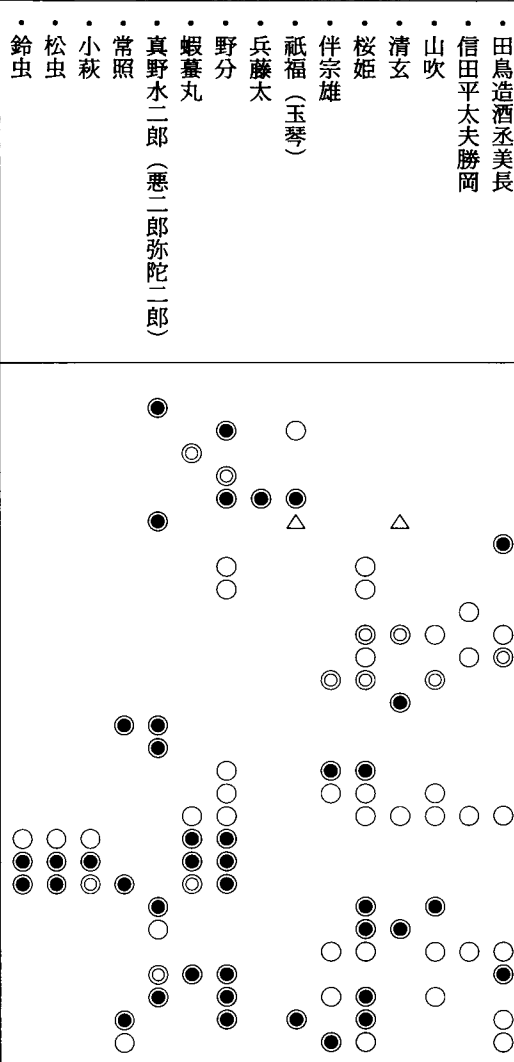
『曙草紙』のために——そのためにも同時代の読本・台巻などを通時的、共時的に眺める視野が必要となってくる。何が風潮であったのか、年々変わりつつあるトレンドの中で、なにが「今」必要であったのか等々、今後の課題とすべき問題である。

《注》

注① 『曙草紙』の主要な登場人物を一覧表にまとめると次のようになろう。

※「●」主な登場(会話主体・行動)／「◎」副次的登場(心中会話・一部会話含む)／「○」地の文・会話中における解説的登場(場面性のない)／「△」後に判明

・ 驚尾十郎左衛門平義治	○	1a	
・ 篠村公連	○	1b	
・ 篠村公光	○	2b	
		2c	
		3	
	●	4	
	●	5	
	◎	6	
	◎	7a	
	◎	7b	
	◎	7c	
	◎	7d	
	◎	7e	
	◎	8	
	◎	9a	
	◎	9b	
	◎	10	
	◎	11	a b
	◎	12	
	◎	13	
	◎	14	
	◎	15	
	◎	16	
	◎	17	a b
	◎	17b	
	◎	18	
	◎	19	
	◎	20	



※登場人物の命名に関して、次のことが明らかとなっている。

- ・『勸善桜姫伝』にある名―鷲尾十良左衛門平義治・篠田八郎・一子次郎光・桜姫・清玄(清源)
- ・『勸善桜姫伝』からの改変―田鳥造酒之丞美長(『伝』の主人公安栗三木之助伴善長から)。
- 信田平大夫勝岡(信田平大夫時元と紀勝岡から)
- 佐伯平弥二と宗雄の父希雄(佐伯希雄から)
- 伴宗雄(伴善長と『勸善桜姫伝』の太良丸出家の趣向を利用) … (ウ)
- 『壇浦兜軍記』の場面から―玉琴…(サ)
- 『奥州安達原』の袖萩から―小萩…(サ)

京伝「曙草紙」のために

注② 京伝による清玄桜姫演劇の理解を「曙草紙」の中に探るならば次の文面であろう。

・昔より兒女の耳にふれたる清水寺の清玄、美女桜姫を執愛し、死して怨魂姫をなやましたる物語（第一）
・曾て傀儡の謳語雜劇の院本等につくりて勸懲の意をしめし、普く兒女の耳にふれたる清水の清玄法師といふは乃ち是なり（第七）

注③ 「京伝は、演劇種としては有名な清玄・桜姫の話にいちおうの義理立てを示すばかりで、特に深入りしようとはしていない（ト）」という見解もある。

注④ 例えば、佐藤深雪氏は「曙草紙」を、京伝による「勸善桜姫伝」批判として理解されている。その主旨を要約すれば、「曙草紙」の引用書目の半数が、「勸善桜姫伝」の引用書と重なるか、またはその補足的説明となる書であることに注目し、「曙草紙」の引用書目から読みとることのできる京伝の綿密な考証が、典拠である「勸善桜姫伝」を素材的に解体し、粉本としての意味を希薄化してしまっているとする。そして「勸善桜姫伝」を相対化し、新たな主題のもとにそれを再構成するための基盤となったのが、あまねく世に語り伝えられたという「清玄桜姫説話」にほかならならず、「京伝の挿入文は、清玄桜姫説話の考証と一体となって「桜姫伝」の構想の基盤となった考証の過程を切り崩す痛烈な批判となっている」というのである。（ス）

京伝による「桜姫伝」批判という理解、これもひとつの解釈として成り立ちうるであろう。他にも、次のような見解がある。

注⑤ 京伝は△母と子にまつわる民俗信仰▽、△女人墮獄・救済の民俗信仰▽などのモチーフに関わるものの内、△後妻打ち▽については「石言遺響」とその粉本「小夜中山靈鐘記」、そして「苜蓿道心行状記」の三者に拠った。△子安▽については古浄瑠璃「一心二河白道」、そして△産女▽については「七墓巡」あるいは「靈鐘記」、また演劇の「小夜の中山物」に拠ったのである、ということができようか。その際、馬琴が粉本から採らずに排除した△産女による赤児加護▽を京伝は最も重要なモチーフ類として採用し、「桜姫全伝」内に核心的な構想の一つとして形象化したのであった。（フ）

注⑥ 野分の方、弥陀次郎、蝦蟇丸、これら三人全ての人間に携わるのが鷲尾義治であり、そのことが唯一の物語連鎖を担うものとなっている。

注⑦ ほかにも次のような見解が、従来からある。

・最終的に妻野分の方と妾玉琴双方とも、加害者でも被害者でもある宿命的な運命をたどり死んでいくが、妻と妾の対立関係を作った夫義治の存在は、物語の展開のさなか、突如抹消されてしまう。それも、京伝の意図的な作為にものとづくものと考えてよいであろう。(七)

追記

入稿後の校正段階にて、酒井美和氏による御論考「弥陀次郎からみる『曙草紙』——引用書に関する考察——」(香椎瀉39 平成六年三月)の存在に気がついた。

また、井上啓治氏の御論考「『桜姫全伝』論序説」(読本研究第九輯 平成七年十月)、「『桜姫全伝』論前説——中世伝承世界及び近世初期(清玄桜姫説話)から中期『勸善桜姫伝』へ——」(就實語文16 平成七月十一月)が発表された。右注記によれば、「統」『桜姫全伝』論前説」(『就実論叢』25)も平成八年二月に発表されると言う。今回の考察で、右の成果を反映できなかった点を遺憾に思う。後考を期したい。

(平成七年十二月五日記)